2025年11月

課題本 『二番目の悪者』

林　木林/作　庄野　ナホコ/絵　　小さい書房　　２０２１年

◆◆◆11月の読書会から

今月の課題本は『二番目の悪者』という絵本です。王様になりたかった金のライオンは、街外れに住む心のやさしい銀のライオンが次の王様候補という話を聞いて、銀のライオンの悪い噂を広めて歩く…。

毎月の課題本と比べると読み易かったかもしれませんが、この本は何が言いたかったのか、どうすればよかったのかを考えると語りあいは尽きませんでした。

（文責：森下）

2025 年 11 月 竹原読書会『二番目の悪者』

（林　木林/作　庄野　ナホコ/絵　小さい書房　2021 年）

吉川五百枝

最初の頁で〈これがすべて作り話だといいきれるだろうか〉と書かれていますが、これはすべて作り話です。金色のたてがみのライオンにも、銀色のたてがみのライオンにも、であったことがありません。それに、どの動物も同質の日本語をつかっています。この作品のように、動物の物語として描きながら、人間世界に対する皮肉や警告を発する傾向の作品を、「寓話」と呼んでいると思うので、その中に数えられそうだと考えました。

小説に類するものは、全て「虚」であるというのは承知の上ですが、長いお話では、さまざまな人物像を立てて、その心や感性の絡まりを解いていくのに時間がかかります。絵本は、たいていの場合、文章が短く、その絡まりが単純なので、一見わかりやすいと考えますが、単純化すると、読み手の１人１人が書かれていない「虚」を想像しなければなりません。考え始めると、単純な筋立てのはずなのに、なかなか終われないのです。

この作品も、最初は、ああ最近話題になっているSNSの虚偽の拡散の問題を示したかったんだろうなと思いますが、それだけではなく、「悪者になるのか、他の人が悪者にするのか？」と、自分に求められる想像部分の結論がなかなか出ません。

作品の題は、「二番目の悪者」です。ということは、「一番目の悪者」があるという事になりそうです。表紙では、「考えない、行動しない、という罪」と掲げられていますから、罪の内容は、「考えない、行動しない」ということになります。これをものさしにして、一番目二番目と勘定するわけです。

途中で〈金のライオンの他には、悪意のあるものなど、誰ひとりとしていなかった〉という一文にであいます。まずは一番目の悪者として金のライオンがあがってきました。でも 2 番目の悪者が現れていない時点では、暫定 1 位となるでしょう。

金のライオンにしてみれば、望んで金のたてがみに生まれてきたのではないし、他の人を

傷つけてお金持ちになったのでもありません。美しい金のたてがみや莫大な財産の中に生まれてきてしまったのです。

それに、どうやら金のライオンの周りには、それらのこととどう付き合っていけば良いかを考えさせる師がいなかったようです。美しい金のたてがみも、莫大な財産も、それ自体は、善でも悪でもありません。

暫定 1 位になったのは、悪意があったからだということになります。その悪意を最近よく使われる言葉で言えば、相手を誹謗中傷すること。根拠のない悪口を言って他人の名誉を傷つけることとなります。誹謗中傷するためには、考え、行動しなければなりません。悪い噂を考えて作り、来る日も来る日も広めるために歩きます。始めに書かれた「考えない、行動しない」という罪には該当しないことになってしまいました。それでも、だれひとり相手にならなければ、1 人の変わり者として泡のように消えるでしょう。しかし、悪口に乗り、尾ひれをつけて言いふらした人々があって、金のライオンは新しい王様になりました。1 人の嘘つきに、周りの者が光を当て、りっぱな表現者にしてしまったのです。どちらが悪者なのでしょうか。王様は〈好き勝手に国をおさめた。〉と書かれているのだから、周りの人の言葉には耳をかさず、自分の欲望の実現だけを考えたようです。やがて、〈民衆は、仕事も家も土地も、生きる希望もなくした。国はたちまち、荒れ果ててしまった。〉と書かれます。これは、金のライオンを一番目の悪者に推す理由となるには充分です。

金のライオンを王様に推した人々は、誹謗中傷に乗ってしまったと歎きますが、「ただ、仲間に教えただけ」「ちょっと気になってメールを転送しただけ」と〈悪意のあるものなど誰 1 人としていなかった〉つまり“真実相当性がある”と認めることにしてしまいました。

「どうしてこの国はこんなことになってしまったんだろう」と人々は考え始めます。

その方向に導くのは、野ねずみが〈「自分の目で何か一つでもたしかめたっけ…？」〉という言葉に示されます。

〈「本当に、金のライオンだけが悪かったのか…？」〉と、頭上の雲につぶやかせますが、噂に流されたその挙げ句の果ての世界をみせつけて、〈「だからこそ、なんどでもたしかめよう」〉と、考え、行動することの大切さを説いています。

金のライオンと、金のライオンに光を当てた人達と、どちらが悪者の一番目か二番目かを競っても意味はなく、扇動者と追従者は、価値的にマイナスの相乗効果をもたらして、嘘を拡散していく共同責任があるはずです。

その一番目と二番目の間に、別のさまざまな人々の登場を想像するのが読み手のしたいことです。金色のたてがみのライオンが、他の信頼できる人々と共に成長して居れば…、自分以外の世界がある事に触れていれば…、財産だけが幸せの源ではないと知る機会があれば、…銀色のたてがみのライオンと対話していれば、…。

この本のメッセージを手短に表現してしまえば、二番目の悪者は誰かという話で終わってしまいます。でも、生まれつき悪に馴染んでいる人間はいないし、生まれてから死に至るまで、すべての場面で悪をなす人間もいないでしょう。

〈嘘は向こうから巧妙にやってくるが、真実は自らさがし求めなければみつけられない〉と、全てを見ていた立場の雲はそう言います。でも、嘘か真実かは、そう簡単に見極められるものではありません。それを知る手立てが問題なのです。

最終ページでは〈しかし荒れ果てた大地には、もう誰の姿もなかった。〉と人間が消えています。悪者は、一番目でも二番目でも結局、自分自身も壊してしまうのだというように。

でも考えるのです。銀色のたてがみのライオンに助けられた経験のある者達は、どこに行ってしまったのか、と。噂話が広がっても、銀色のライオンは苦笑するだけで〈誤解はいつかとけると信じていた〉はずです。その〈いつか〉は来なかったのか。 昨日の各種報道によると、名誉毀損容疑でN党の党首が逮捕されたそうです。“真実相当性”が在るという主張が通るのでしょうか。

嘘か真実かを見抜けない目には、この作品は眩しい作り話です。

『二番目の悪者』を読んで

◆【 ZK 】

この度は子供から読める絵本でした。読んでみると、あーよくあることね、世の中には。ということでした。宗教、政治で特にありがちです。

さらに、あの人が悪いことをしたわね。でもあなたのこういうところも悪かったわよ。という二番目に悪いことについて物語として描かれていました。

今世の中にはフェイクニュースが溢れています。いつも誰かがとことん干されています。しかし反面無関係無関心でいることが自由な生き方とも感じます。巻き込まれて無駄な時間をすごしたくないからです。

この銀のライオンは反論したことは描かれていません。たぶん金のライオンは故意に悪いことを言っているので言っても相手にならないと腹をくくったのだと思います。銀のライオンが親切なところをちゃんと知っているのにわざと中傷しているのです。誤解ではなくあからさまにわざと中傷しているのです。このような人に反論しても無駄だと思ってしまいます。わたしなら。

批判するひとはいつも人に感謝せずに自分に自信のない人が多いと思います。自己弁論しなくても賢いひとはちゃんと見抜いてますから時間にまかせたら良いと思います。が、物語の最後のように世の中がすさんでしまいました。影響が大きいとこうなるんでしょう。

もうひとつは確かめる気持ちもなくただ人がこういっているのを聞いたと話している人もいることが大多数の流れなのでしょう。

たわいのない話が大きくなるのをねらったインターネットのふっかけを専門にしている人もいるとニュースでしていました。世の中や各界を動かそうとしているのです。

すべての人の話をしんじず人への影響を考えるようにしたいです。身近なところにも放送局はいます。

◆【 JM 】

今月の課題本は絵本であった。私が読書会に参加してから初めての絵本で、「さくっと読めるなぁ」などと思っていたら大間違い。テーマが深すぎて考えても考えても混沌として闇の

中である。

威張りん坊で金持ちの金のライオンが王様になりたいと欲する。しかし、親切な銀のライオンの評判を聞き、金のライオンはあせる。邪魔者の銀のライオンを貶めるべく、様々な悪い噂を流していく。初めは信じなかった動物たちも、次第にその噂を信じ始める。こうして王様になった金のライオンは国のことなど考えず、贅沢三昧。戦争まで起きてしまう。とうとう国は滅び、動物たちの影も見当たらない荒涼とした世界になったところで終わっている。

ありゃ、これって今の人間社会のことじゃないか。ネットに書き込まれる信憑性のない噂話。裏掲示板のようなネットによるいじめ。選挙戦に絡んでは真実ではないことを挙げた逮捕者まで出た。悪意をもった操作なのか、自分の流した嘘が拡散していくのが楽しいのか、ストレス発散なのか、こうしたニュースは日々聞こえてくる。

1 人ひとりが真実を見極める目と心をもち、噂話やいじめに加担しないことが大切だと思う…と読書会に参加したのだが、吉川先生から「二番目の悪者って誰？」と聞かれて「？？？」となってしまった。そりゃあ一番目に悪いのは金のライオンで、二番目に悪いのはその噂を信じた動物たちでしょ…と思ったが、それだけではないのだろうか。反論しなかった銀のライオン？　答えが見つからない。もちろん読み方はそれぞれだが、疑問を投げかけられてそのままというのも落ち着きが悪い。

ネットが生活の中に入り込み、今さらカットすることはできない。では、どうしたらいいのか。フェイクニュースや悪意を持った書き込みに対して厳罰化しても、解決するとは思えない。ましてや 1 人ひとりの良心に訴えることなど無理であろう。

私たちは滅びるかどうかの岐路に立っているのか…恐ろしいと思った。「考え続けなさい」という宿題をもらった。

◆【　伊達悦子　】

かつて「二番目では、だめでしょうか。一番でなければ、いけませんか。」と質問された、国会議員がいらっしゃいました。この発言の「一番、二番」は結果における順序のことであり、その働きの経過ではない。我々の周りは、結果につけられた数字を重視することが、多いのではないだろうか。

今月の課題本である『二番目の悪者』とタイトルがつけられている。話のストーリーは、短くまとめることができるが、自分の経験を重ね合わせると、読書会でもそうであったが、なかなか深い読みになっていったように思う。

「金のライオン」は、一国の王となりたかった。王の座を自分のものとするために、とんでもないことを始めていく。それは、街外れに住む優しい「銀のライオン」こそが、次の王様候補との噂を聞き、自分を次の王様とするために、「銀のライオン」をおとしめるための誹謗・中傷のうわさ話をながしていった。森の動物たちは、始めはその話を信じようとはしなかった。「銀のライオン」でさえ何も言わずいずれは誤解が解けるだろうと黙っていた。しかし、次々に「銀のライオン」の真実の姿は、見えなくなり「金のライオン」が、王となる。しかし、自分の欲を叶えるためだけに国を動かすことで、国を守ることはできない。他国からの侵略と王の傲慢さによ

り国は滅び、何もなくなってしまった。という話であるが、「一番目の悪者」は、ありもしない話をでっちあげた「金のライオン」に違いない。では、「二番目の悪者」は、銀のライオンに向けられた噂話を確かめもせずに拡散し、信じ込んだ動物たちということになる。同時に、悪意に対して傍観者であり、何も言わなかった「銀のライオン」も二番目の悪者になるのではないだろうか。日本には、黙っていることを美徳とする文化のようなものがある。

「〇〇らしい」「〇〇かもしれない」または「〇〇さんが、言っていた」等々、妬みや嫉妬からの誹謗や中傷も、現在は SNS で拡散され、選挙の結果をひっくり返すこともある。また、命さえも奪ってしまう。伝わってきた情報を、自分で確かめることも、考えることもせず広げていること、何もしないでいることが、重大な「悪」となっている。これだけ情報網が氾濫している社会で、「二番目の悪者」とならぬようにしたい。

読書会を通して、真実を見抜ける力と考え行動する「同じ土俵に立つ」仲間の存在に感謝です。

1冊の本を読むとき年齢に下限はあるけれど、上限はないと思います。今回の本は、大人も読める絵本だと思います。絵本は、短い中での表現ですから、絵も言葉も作者は精選しての表現だと思います。

「嘘は、向こうから巧妙にやってくるが、真実は自らさがし求めなければ見つけられない」
自らを研ぎ澄ますためにも、1冊の本を通して学ぶ読書会は大変意義深いことです。

◆【 T 】

本の中に二つの噂が出てくる。一つは初めに流れた銀のライオンの噂。

「ねえ、知っている？街外れにとっても心のやさしいライオンがすんでいるみたいよ」

「やさしいだけじゃなくて、すごく強いらしいの」

もう一つは、金のライオンが意図的に流した銀のライオンの噂。

「ねえねえ、聞いた？昨日は、あの暴れ者のトラとなぐり合っていたらしいわよ」

「しかもいきなり飛びかかっていったみたい」

正反対の噂を聞いた時、自分ならどう判断するだろうかと考えてみたが、正しく判断することはなかなか難しいなと思う。森の動物たちも初めは半信半疑だったが噂が広まるにつれだんだん洗脳されたような状態になったのではないだろうか。繰り返し同じ噂を耳にしたり、たくさんの人から同じことを言われたりしてだんだんと信じていって噂を広めてしまったのだろう。

噂には本当の噂も嘘の噂もある。また、嘘と本当が混在している噂もある。全ての噂が本当かどうか一つ一つ確かめることはとても難しい。だから、聞いたとき盲信するのではなく、もしかしたら間違っているかもとか誰かにとって都合の良いように作られた話ではないかと考えることは大切だ。また、様々な情報に接して自分なりの考えを持つことも大切だと思う。

〈金のライオンの他には悪意のあるものなど誰一人としていなかった〉とあるが、悪意がなくても噂を広めることが大きな影響力を持つことも考えなくてはいけないし、広めることには責任を持たなくてはいけない。悪意があるかないかが問題ではない。噂を広めた森の動物たちには悪意はなかっただろう。しかし結果として悲惨な状況になったとき彼らは自分たちのした

ことをどのように考えただろうか。少しは悪かったけれど、一番悪いのは金のライオンで金のライオンが言わなければ自分たちも言わなかった。自分たちは二番目で、そんなにも悪くはないと責任逃れをしているのではないか。

現在問題になっている物に SNS がある。SNS は様々な情報を得るのに便利なサービスでスマホ・パソコンがあれば簡単に必要な情報を手に入れることができる。しかし、得た情報が全て正しいとは言えない。誤っている情報も含まれている。誤った噂を広めないためにも、SNS からの情報を鵜呑みにすることなく、一旦立ち止まりよく考えることが大切だ。

◆【 KH 】

1番の悪者はわかりやすい。2番目は？と初見の感想メモにある。

1 番悪いのは、金色のライオンに決まってるじゃないの…ところが

確かに、戦のため国を破滅に導くほどの悪さを金色のライオンがしたかと問われれば、その“国”の他の人、いやこの絵本では動物たちはただ指をくわえて見ていたの？1番の悪者は金のライオンと決めつけられないよなあとトーンダウンしてしまった。年取った王様は、皆で新しい王を選ぶようにと伝えた。そして、皆が選んだのが金色のライオンだった。戦が起こる前、戦の最中にだってきっとたくさん手立てはあったはず。自分の事として何も考えず何の手立ても講じなかった者全てが2番目の悪者たりうるということか。しかも、噂を広めたものに積極的な悪意はない。自覚もない。無自覚の一市民こそむしろ結構な悪者かも。と思えて来た。

“無意識”＝考えない ことはよくないことですよ。皆さん何が本当か、そうでないのかよく考えて行動しましょう！！といかにも道徳的にこの話を収めようとすれば話は簡単だ。例えば、小さい子どもとかに読んで聞かせるのであれば。

しかし、よくないなぁと解っていてもつい、または自分の保身のために噂を否定しないこと。噂話に加担すること。場の雰囲気を損なわぬよう、積極的に非難はしなくても、否定もしない態度。そういうのが2番目の悪者だとしたら、さっそく身に覚えのある過去のあれこれはいくつも浮かんでくる。

噂話はそもそも無責任。だから銀のライオンのように、苦笑してやり過ごすのは大抵の良識ある人の対応だと思う。いつか真実は明らかになる。何も言わない、抗議しない生き方、自由はあっても良い。しかしその結果、絵本のように、世界が戦争によって終わってしまったら…そうならないように私がするべきことは何か？声をあげる勇気をもとう。たとえ、一人の声は届かないとしても、諦めたらいけないのだ。と道徳的に模範的な答えが浮かんでくる。でも本当に一人が勇気を出せば世の中は変わるのか。それは難しいと思う。人間は弱い。生きるために考えるが、生きるために考えることを放棄せざるを得ないことだってある。

アウシュビッツで働いていたドイツ人女性のことが、頭に浮かんだ。彼女らは、ドイツの降伏後囚われの身となり、こう言った。命じられるままに働いただけ。ユダヤ人に対する嫌悪感も罪悪感も何もなかったと。何も考えなかった罪。逆らえば自身に死や刑罰が及ぶ戦時下での状況だとしても、あのおぞましい蛮行の数々は、考えない人々の加担によって行われ、たくさんの命が失われていった。戦争と噂話ではレベルが違うでしょと言われれば、確かにそう

だけれど、噂話が人を追い詰め命を奪う事態にもなりうるではないか。

心に境界線を持つ、ここから先はたとえ気楽な噂話だと思っても、自覚を持って踏み込まない。加担しない。そんな基準を意識して持つことがやっぱり大切だと、この絵本を通じて考えた。

話は変わって、読書会の最後に私の頭の中に浮かんでいたのは、チェロと白鳥について。サン・サーンスの『白鳥』が頭の中で響いていた。白鳥の優美な哀しさがテーマの曲。最初の見開きの絵は何を象徴としているのか。人間の存在の哀しさ。美しくも孤高な白鳥をイメージしながらチェロを弾く人間の姿かなと。向かい合うページは哀しみ（白鳥そのもの）を抱く人間の姿。でも、そんなのは人間が一方的に抱いたイメージとも言える。最後の絵からは、国が滅び、存在の孤独という概念そのものがなくなった場から歩き去る白鳥。そして、奏者のいなくなったチェロが椅子に立てかけられた絵。奏でる人がいなければ“ただのもの”、人間の存在の儚さを象徴しているのだろうか。そもそも存在の儚さなどと考えるのは人間だけだから、白鳥は何もなくなった国からただ、スタスタと歩き去って行くように見える。薄ら寒い風が吹いてくる。

絵本から飛躍するようで恐縮だが、どこか一つの架空の国が滅びてしまったという話から思ったこと。踏みとどまるべき時は、今なのかもしれない。この星に住む一人ひとりが如何に、地球を保って行くべきかを考える時に来ている。一人ひとりの責任において。そんなことを、違法な伐採が進み危機的な状況にあるという、アマゾン熱帯雨林の惨状を綴ったドキュメンタリーを見ながら考えた。

◆【 K子 】

悪者に一番、二番があるのでしょうか？

今月の課題本は読書会には珍しく「絵本」です。対象は絵本と言うとつい子ども向けと思いがちですが…実はこの本は小中学校での読み聞かせや、高校や大学などの演劇、企業の新人研修に使用したいと依頼されたこともあるそうです。本の登場人物（？）は金のライオンが表紙に一目見てすごい～。銀のライオン（人格者）、森の動物たちです。本の内容としては、誰にでも該当するものだと思います。今の世の中まさにドンピシャです。私もその中の一人です。流れてきた噂をそのまま次へ「知っている？」という形でおくってしまうことが多々あります。「エッ？そんなこと」と思い、疑いも持ちますが深く追求しないのです。「行動しない」「考えない」ことが罪となり悪者になる要素のひとつかも知れません。結論としては、一番目の悪者は（権力を持っている）金のライオン、二番目は（権力に対して行動しない）周囲の動物たち。でも（人格者の）銀のライオンが自分に対して人格を否定されるような事が多くあっても何も言わないのです。この反論しないことも二番目の悪者の要素があるのでは？という意見も出ました。終幕で（いつも空の上から見ている）雲が語るのです。「誰もいなくなった。」

深く深く考えさせられる台詞でした。

◆【 望月悦子 】

この絵本の中の以下の文章が気になりました。

「これが全て作り話だと言い切れるだろうか」「考えない、行動しないという罪」「誰かにとって都合の良い嘘が世界を変えてしまうことさえある。だからこそなんでも確かめよう。しかし、荒れ果てた大地にはもう誰の姿もなかった」「嘘は向こうから巧妙にやってくるが、真実は自ら探し求めなければ見つけられない」

絵本の世界を通して悲しいかなこれらすべては、現在の老若男女に当てはまる内容であることが実に情けなくよく良くわかります。

作者は、大人になってからでは遅いと危惧して、幼い子どもたちに絵本からこの内容を考えて欲しいと作成したのでしょうか。それでは、その思いを受けて語り部はいかに語っていくのが望ましいのでしょうか。

個人的には、題名を「二番目の悪者」を「二番目が悪者」に変更して「荒れ果てた大地にはもう誰の姿もなかった」と最後のページにつなぐと、悪いことをするとこうなるんだと分かりやすいのではないかと考えました。そこで、一番目・二番目とは誰のことを言っているのかをその理由と内容について子どもたちと一緒に考え想像してみる。勿論一番目が一番悪いに決まっている。王になった金のライオンは、自己中心で勝手で自分さえ満足すれば・できればということを考えで自分勝手な政治をしたことが一番悪い。それなのに二番目が悪いのは何故か。人気のある銀のライオンを含めて悪いのはみんななのではないか。他人事で責任を取らないでいつの間にか、自分の意思ではないのに誰かを悪者にしてしまうことに加担しています。そもそも噂は、「そんなことあるわけない」と否定や疑問から始まり、「まさかと思っていたがひょっとすると本当かもしれない」と半信半疑に変わり、「みんなそう言っているし、火のないところに煙は立たない」と嘘がまことしやかなことに変わり、挙句の果てには噂には尾ひれがついて、メールなどの機器を使って世界に広がっていく。ちょっと立ち止まって「これっておかしくない」と考え確かめる者が出ても、少数意見として取り上げられないのか、確かめるゆとりさえなくなってしまうのか。嘘が「本当のこと」として知れわたっていき、偽りが「真実」としてまかり通ってしまう。誤解はいつか必ずとけると思っていてももう手遅れで、大きな力になっては救いようが無くなる。こうして、人間の傲慢や野心が巧妙なやり口によって、人間のもう一方の無責任さ・集団になびく弱さ等を煽って簡単に戦争さえも起きてしまう。

悪者には、一番も二番もなく、人間には悪人にも善人にもなる要素を持っているという自覚なしに生活していては、いつでも悪人なってしまう。「考えない行動しないという罪」の自覚を常に持ちこれでよいのかと確かめながら一歩一歩生活していかなければならないことが求められます。

また、「二番目が悪者」と限定していては作者の意図から逸脱することも理解できました。やはり「二番目の悪者」の題名の方が自由な発想ができ、子どもたちに考えられる限りの内容を一緒に想像し、内容を深めていくことが肝要だと思い直しました。深い内容の絵本だけに、語り部は子どもたちの思考力や想像力を邪魔しないように、語り部もまた自分の価値観や思いを押し付けるのではなく、子どもたちの自由な思考力や想像力を引き出せるように語っていくことが求められるのではないだろうか考えました。

◆【 MM 】

読書会では「金のライオンのほかに悪者は？」という話が出た。人から聞いた話を他の人に教えた動物たちはもちろんそうだろう。銀のライオンはどうか？私にとってこれは新しい視点だった。

銀のライオンは悪いですかね？私が銀のライオンだったらどうするだろう、どう思うだろう。「なんか自分についての悪いうわさが流れているようだ」「今までの自分のしてきたことを見て判断してくれるんじゃないかな」「なんかみんなよそよそしくなってきた？」「あーそっち側に流されちゃったか」…と想像する。

人の口に戸は立てられない。事実と反することが流れていた場合、それに反論することも大事だ、という話が出たが、私は「そう思う人はそう思えばいい」「そっかぁ」と思ってしまう。反論したところで、火に油を注ぐようなものだ。それで炎上する SNS を見たことはないか？わかっていない人に何かを言ってわかってもらうことができるのだろうか？こう考えることは逃げなのか？逃げというならそんなことからは逃げてもいいと思う。私のやってきたことで私を判断してもらうだけだ。

一方、私がほかの動物の立場になって、もし「銀のライオンって乱暴ものなんだって」という話が流れてきたら？と想像してみる。銀のライオンを知らなければ「そうなの？」とその場を後にするか銀のライオンを知っていれば「私にはそんなことないけどね」とここでは否定する。その話をほかの動物に回したり、ましてや銀のライオン本人に「なんかこんな話が出ているよ」なんてことは言ったりしない。読書会で話したが「あなたのためを思って」みたいな話にその人のためになることってあるのかしら、と疑う。似たような感じで「あの人とは付き合わないほうがいいよ」という話に出会った場合、私はそれを言ってきた人と距離を置く。

自分がどう思うかで判断している。軸は自分の中にある。人がその人をどう思っているのか、は強く言えば私には関係ない。私とその人の関係性でしかない。

こう考えるのは私が大人だから？そう言われたらそうかもしれない。これまで経験してきたこと、その他に大きく私に影響を与えたのはやはり本と人だ。いろんな本を読んで執着しないことを学んだ。それから、人を動かすのは難しいこと、変えられるのは自分の考え方、捉え方。自分の居場所を複数もつことが私にとっては重要だ。一つの世界がだめでも八方ふさがりになったりしない。学校や職場がだめなら家庭でもいいし、習い事など外の世界、それも無理なら本の世界。読書会でみなさんの考え方に触れるのも私にとっては大きなことだ。世代も経験も違う人の話を聞くと、私の悩みが取るに足らないことに思えたり、人生の通り道に過ぎないことに気づくこともある。「こんなことに悩んでまして」と話すことはないが、いろんな話が糸口になって「今日はこれを聞く日だったんだ～」とお土産をいただいて帰る日も少なくない。

大きな流れに巻き込まれそうになったとき、流されるのは簡単で、「これってどういうこと？」と考えて調べること、自分なりにそのことについてどう思うかがが大事だと思う。イメージとしては流れを作ろうとしている誰かや何かを想像する。以前にも書いたが吉川先生がおっしゃった「〇〇の顔をした△△」が見えてこないか？を考えるようにしている。